

コミュニティ活動と地区形成の関係に関する研究-滋賀県高島市大溝地区を対象として-

京都大学大学院 学生員 ○田中 倫希
 京都大学大学院 正会員 出村 嘉史

京都大学大学院 学生員 片岡 由香
 京都大学大学院 正会員 川崎 雅史

1. 研究の背景と目的

近年、地方都市の伝統的な生活景は伝統文化的景観¹⁾と呼ばれ、地方都市の魅力的な景観として見直されている。また伝統的な景観を守るだけでなく、新しい商業活動や文化活動が活発になることは日常生活に多様性を与え、都市の魅力が向上すると考えられる。

滋賀県高島市の大溝地区は城下町であり、周囲を豊かな自然や水田に囲まれている。図1のように、この町は歴史的な水路や旧式の水道、町並などの景観資産が、徒歩圏内に収まるコンパクトな地区である。これらの景観資産の維持や伝統的な祭である大溝祭の運営は、地元の住民の手で行われてきた。一方地区中央部では、住民により、古民家を再利用した市街地の活性化活動が行われている。しかし、上記のような活動に対して、新しい住宅地である城山台の住民は積極的に参加しておらず、活動の衰退や停滞が予想されている。

本研究では、これらの活動に対して、城山台の住民から積極的な参加が得られていない原因を明らかにし、伝統的な景観の継承や市街地の活性化に主眼を置いたまちづくりについて考察することを目的とする。

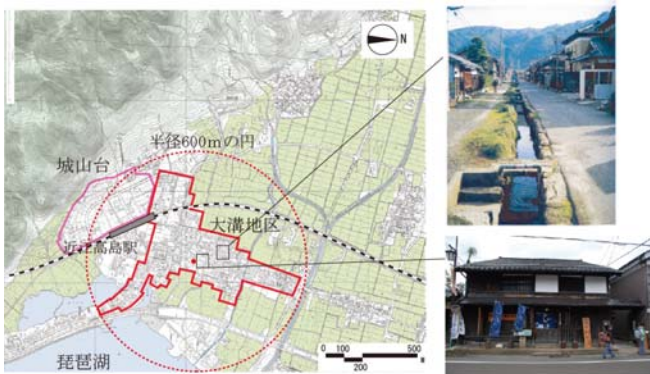


図1 対象地概要(左)及び水路(右上)と古民家(右下)

2. 大溝地区のポテンシャル

(1) 伝統的な景観

中世における大溝地区の形成過程で、街路を中心とした両側町が成立し、現代でも伝統的な行事や町内での仕事を両側町単位で行っている。この両側町が幾つか集ま

って「山組」となり(図2)、大溝祭の曳山の修繕費の負担や祭でのお囃子の練習等を山組毎に行っている。この大溝祭は、祭のために地元を離れた元住民も戻ってくるような、大溝地区の伝統行事である。

また大溝地区では、湧水地帯の水を竹樋や水路で集落に引水し、住宅内の井戸や水路内の利水空間で生活用水として使用する習慣がある。これらは、現在でも一部の住民に使用されており(図3)、井戸水については水源を共有する近隣が、水路については山組が、水源や配管等の清掃や修繕費用の負担を行っている。

以上のように、大溝地区の伝統行事や景観資産を維持し継承している主体は、街路を中心に関わりを持つ伝統的なコミュニティであることが分かった。

一方で、大溝地区は高齢化が進んでいるため、伝統の継承が懸念されている。それでは、景観資産の維持活動や伝統行事を継承するためには、地区内外の新しい居住者が、ただ単に伝統的なコミュニティとの関係性を持つことが望まれるのだろうか。

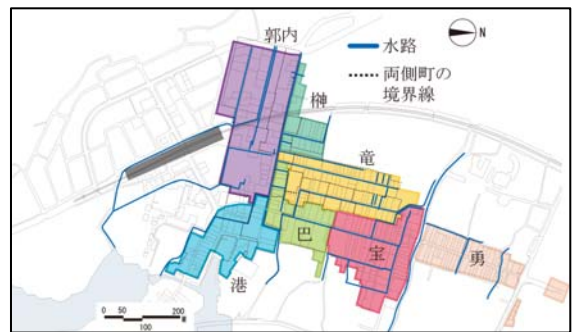


図2 山組の構成と水路

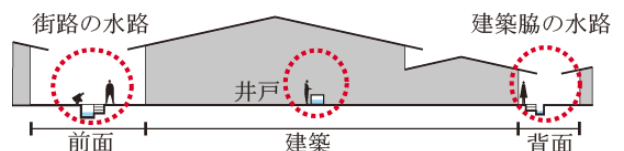


図3 湧水の利用概念図

(2) まちづくり活動

大溝地区の商工会は地域の活性化を目的としたまちづくり活動として、古民家を改装した店舗の経営を行っている。かつては商店街の店主を中心に店舗運営していたが、現在は地区内に入居した新規の住民がテナントとな

Key word コミュニティ, 地区形成, 高島市, まちづくり

連絡先 〒615-8540 京都市西京区京都大学桂 C1 棟 京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 TEL&FAX 075-383-3328

って店舗経営を行っている。

それらの店舗は、高島周辺に少ない飲食店や食料品店であるため、付近の住民に利用され、一部の店舗は交流の場として利用されている。そのため、店舗やまちづくり活動が発展することは、経済活動の活性化や住民間の交流の増加に繋がると考えられ、ここにまちづくり活動が活発になる意義が見受けられる。

3. コミュニティ活動への住民の参加

前章のコミュニティ活動への住民の参加を、アンケート結果より分析する²⁾。

図4から、地元の住民のほとんどが、祭や景観資産の維持活動に参加しており、地区内の新規の住民も参加していることが分かる。一方、城山台の住民には、景観資産の維持活動に参加している人はおらず、中には水路や井戸の存在を認識していない住民もいた。また、祭の運営にも関わっていないことが分かった。

一方図5より、現在はまちづくり活動に参加していない地区内の新しい住民の中には、活動や店舗運営に参加する意志のあるものが見られた。一方、城山台の住民は店舗に興味を示す程度であった。

高島町出身	居住地	人数	大溝祭へ参加している人数(%)	水路掃除に参加している人数(%)	旧式の水道の維持活動に参加している人数(%)
いいえ	城山台	7人	0人(0%)	0人(0%)	0人(0%)
いいえ	大溝地区	20人	16人(80%)	16人(80%)	6人(30%)
はい	大溝地区	77人	61人(79%)	68人(88%)	41人(53%)

図4 伝統的な維持活動への参加頻度

高島町出身	居住地	人数	店舗に関心があると答えた人数(%)	活動に参加する意志があると答えた人数(%)
いいえ	城山台	7人	2人(29%)	0人(0%)
いいえ	大溝地区	19人	1人(5%)	3人(16%)
はい	大溝地区	66人	14人(21%)	10人(15%)

図5 まちづくり活動への参加の意思

4. 地区毎の意識の違いを生む要因

高齢化により大溝地区内の空家が増加している一方で、行政は市街地の外である城山台の整備を行い、住宅地を拡大させた³⁾。城山台の整備は、その街路線形から判断して駅を中心に行ったと考えられ(図6の点線)、住民は駅を利用して通勤する人が多い⁴⁾。

一方、大溝地区は物資の集積地として、港と本町通りを中心に発展し(図6の太い実線)、当時の外形をほぼ維持している。その中で現在の本町通り沿いには商店街やまちづくり活動による店舗があり、さらに本通りに向かう細街路が発達しているため(図6の細い実線)、本通りが生活や街路の中心となっていると言える。

これらの地区の街路や店舗の位置から、大溝地区と城山台の生活圏はそれぞれ地区内で閉じていると捉えられる。この地区毎に持つ閉鎖性が、一方では、各々の地区内部の住民の交流を生じやすくし、前章のように大溝地区内の新しい住民は地区内の活動に参加する傾向が見られたと考えられる。他方では、両地区間の交流を生じにくくし、城山台の住民が大溝地区の活動に参加しない傾向があると考えられる。

ゆえに、新興住宅地の開発は、大溝地区の景観資産の継承や市街地の活性化にとっては効果的ではなく、都市にあるべき文化的側面を育むためには、大溝地区内の活動や施設を核としたまちづくりを重点的に行う必要があると考えられる。



図6 街路線形及び主要施設の位置

5. 結論

大溝地区の魅力として、現代も存在する伝統的な行事や景観、まちづくり活動による新しい店舗を見出した。これらの景観の維持や店舗の運営を行っている主体は、市街地に住む住民であるが、高齢化や空家の増加とともにコミュニティの縮小が懸念されている。その中で行政により新興住宅地が整備されたが、住宅地の住民は大溝地区の活動には参加しておらず、今後の参加も期待できないことが分かった。以上の結果は、地区毎に閉鎖性を持つことが要因だと考えられる。

ゆえに、伝統的な景観の継承や市街地の活性化のためには、市街地の外に新興住宅を整備することよりも、市街地内の活動や施設を核としたまちづくりの方策を、本腰を入れて探ることを優先すべきであろう。

1) 文化財保護法では「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と定義されている。

2) 大溝地区と城山台の住民を対象にアンケート用紙による対面式ヒアリング調査、同様の用紙による郵送調査を実施し、106件の回答を得た。2009年1月7, 8, 9日実施。

3) 高島町、『高島町の歴史』,2003, pp152-153

4) 前掲、アンケート調査より